

蠅螂の斧

# 次の一步

社会システムを変える

第5回

授業「人間コミュニケーション論」

その1

団 士郎

作法の問題を時々考える。それは自分があまり行儀良くないなあと思うからだ。日常的な事だけではない。たとえば、私は漫画を描いているがデッサンのクロッキーだのを本気で考えたことがない。やってみたこともほぼない。描画、描写を志すなら基本はそこだろうと思っている人は多い。でも、そんな考え方を自分に採用しようとしたことがない。

心理の業界で長く仕事をしてきた。初めてケースを担当したのが25歳だから、それから45年、今も現役の相談員だ。この間、経験は重ねてきたが、いわゆる資格は何も持たないまま現在に至っている。けっして学びを拒否してきたわけではない。様々な専門技法への好奇心は持ち続けてきた。しかし、どこかの作法に従って、誰かの門弟になろうとしたことはない。

「家族療法」派だと見なされているところはあるのだろうが、その専門細分化された流儀と特に昵懇ということもない。自認するところは「社会システムの中の関係性」に焦点をあてた家族心理臨床家である。

大学院には16、7年もいることになった。ご承知の方も多いと思うが、大学教授に教員免許はいらない。だから教育を実施することに関して訓練を受けたことがない。いわば、素人教員である。

こう書いているからと言って、描画基礎力不要論でも、資格不要論者でもない。自分がそうだというだけで、それが正しいなどと主張したいわけではない。ただ、そこで忘れないようにしているのは、人は弱いかから、大きな枠組みに守られる資格や立場を得ると、独立性は損なわれやすいという警戒心だ。

寄らば大樹の陰は心情的に理解できる。人はそれほど強くはない。私だって25年も公務員をしていたのだから。手に入った立場や資格があれば、当然そのサイドからものが言いたくなる。そのことを十分承知しているから、私はその立場をとらないようにしてきた。

今回から数回、これを書くことを決めたのは2017年度が私にとって大学院の定年退職の年だからだ。唯一、学部で担当している授業「人間コミュニケーション論」も最終になる。この講義のことはあちこちで話す機会があって、マンガ「木陰の物語」でも一部取上げた。だから、是非もっと詳しく知りたいと求められたこともあった。

そこで調子に乗って、セメスター全体の授業の流れを、何度かに分けて書いてみようかと思ったわけだ。果たしてこれが「変化」や「次の一步」になり得ているのかどうか？それは私が決めることではない。

## 学びはどう説明されるか

FDという文字を時々見る。Faculty Development の略で「大学教員の教育能力を高めるための実践的方法」ということらしい。文部科学省は10年近く前、大学院から導入を義務づけたそうだ。だが、そんなことにはほとんど関心がないので、よく知らない。私が一般的な大学院教員の今日的わきまえから外れていると言われても間違いではない。

私は「特別契約教授」という契約なので、大学院の役職に就いたりすることはないし、教授会に出る義務もない。必然的に現状の大学、大学院に関する常識的理解も欠いているのだろう。

先日もある大学院で依頼された講演の枠組みはFD研修の一環だと知らされたが、こちらには自覚が全くなかった。

しかし、言われなくとも、大学や大学院の授業において、私のようなタイプの教員に何が出来るのかはずっと考えてきた。専門職従事経験の長い者が、大学教育の中でどのような役割が果たせるのかは、大いに関心のあるところだった。

古い話だが自分の学校時代、高等教育の目的がごく少数の賢者・学者の養成のような気がして、残りの多数はそのダシに使われているという被害者意識が消えなかった。

「それはおまえの劣等感だ！」という指摘も否定はしないが、それだけだとは思わない。私の時代、留学は一握りの優秀な人達のチャンスだった。そこから社会の様々な分野への栄達の道が開かれていた。私はいつも、なぜ学業だけが偏って社会から褒め

そやされるのか疑問を持ち続けてきた。教育が相変わらず潜在的に持っている現状肯定の学力競争勝者至上主義なのを好まないのは、十代の半ばまで遡る。とにかく、手段にされてしまって平気な学びが大嫌いなのである。我が国も含めたアジアの過剰な受験騒ぎが大嫌い。だからそうではない道筋を行く人々すべてに、世間に思い知らせてやってくれと願う気持ちが強い。

学ぶとはもっと面白いことだ。私は受験勉強は毛嫌いしていたが、学ぶ事にはとても謙虚で居続けたと思っている。手段としての学習や学力を忌み嫌っていたのだ。

これが多分、私という人間の面倒臭さの一つだろうし、長年、権力を持つ側から受け入れられないできたことに関わっているだろう。

学生時代は、時に敗北主義だといわれ、ガキっぽい詭弁だともいわれた。しかし私が少しだけ本当のこととして知っていたのは、実社会は学校の成績とぴったり相似形などではないことだった。

比較的早い時期に、成績優秀な者は、選択肢の幅を世間から狭められている気の毒な存在だと見破っていた。だってそうだろう、そこに居れば得をすると分かっている、それを放棄するのはなかなか勇気のいることだ。

私はそのことを警戒して生きてきたのだが、20代半ばに巡り合わせて公務員職に就いていたために、50歳で退職するときには、既得権の誘惑から自由になるのに少し勇気が必要だった。手放さない言い訳はいっぱい思い浮かんだが、要するに手に入れてしまうと手放す度胸はなかなか生まれにくい。「欲しい」という希望より、「いら

ない」という意思の実行の方が、すでに手にしている物のある場面では苦しい。

人間の才能は多様だし、それはもっと幅広く活用されなければならない。フィールドを狭く設定した競争の結果が、あぶれて自死を選択してしまうような若者を作り出しているのだと考えてきた。

これは学校における不登校や、社会人年齢での引きこもりも同じだ。どうしてもっと文字通りの多様性を、実現、実行しないのかといつも思ってきた。自分を苦しめている世界だと認識しながら、なおその世界に認められたいと願うのは苦痛でしかないだろう。

誰かからの評価を頭の中に想定して、そこで認められたり、そこでの自己肯定感を云々したりするのは止めればいいのかと思う。そもそも現行の教育枠組みの中で、そんなものを論じていることが、空しいことであるのは自明だ。

## 授業

私はおしゃべりな人間だ。面白いことを語るのに難しさもない。しかし、それを自分のアドバンテージとして社会を泳いでいきたくないと思ってきた。営業トークや誰かのお気に入りになることから離れよう離れようとしてきた。

講演したり、授業したり、ワークショップをしているのも、スキルの切り売り、商品化だという人もあるだろうが、自覚としては、そんな浅薄なビジネスをしているつもりはない。

宴会で座持ちのいい人が、講演や授業が上手なわけではない。自分の得意なことでは

何を目指せるかは、なかなか奥深いことである。

## 「人間コミュニケーション論」

大学院ではなく、学部（産業社会学部）でヒトコマだけ授業を持っているのだが、その歴史は長い。

最初は、まだ公務員現職の頃、突然、面識もなかった立命館大学文学部心理学専攻の教授から声をかけられて「人間関係論」のタイトルで授業をすることになった。ここでは基本的に、現役社会人専門職としての経験を自由に話せば良かった。

その後、産業社会学部で「人間コミュニケーション論」とタイトルした授業をすることになった。それがもう12年も前のことだ。詳細は覚えていないが、何かを指定されて開講したのではなかった。むしろ、このような枠組みで何をやらせてもいいというようなオファーだった気がする。

だから人間コミュニケーション論の講義ラインナップは一から私自身が創った。とくに教科書を想定することもなかった。

## コンセプト

先ず目標を定めた。「コミュニケーション論」と語ると、一般的に想定されそうな排除すべき誤解も明確にした。そして多少価値観押しつけ気味な感じはあるが、教育の名で洗脳されている若者達を、もう少し自由にしてやりたいと思った。（脱学習だ）

詳細には関心もないが、就活の自己分析とか、絶大な占い文化、誰かの起こした不

祥事を見てから登場して解説するTV心理学の解説など。そんなうんざりするような表層的情報でまみれた学生達に、実感として、己と向き合う体験と学びをもたらしたいと思った。

更に開講当時、日本社会はずっと年間3万人以上の自殺者を生み出していた。取り組みもあったが、1998年以降(15年以上)、その数字は長く維持されたままだった。

対策の成果なのだろう、近年この数値はかなり減少傾向にある。とはいえ、二万人は超えている。

今では初回の講義で口にもするようになったのだが、私は「人間コミュニケーション論」の授業の目標の一つに、受講した人達が将来にわたって、自死を選択したりしないことを考えていた。群衆の中における思い込みの孤独、孤立の毒性から、学生達を解放することが目指すべき一歩だった。

果たしてそんなことが出来るのか、などという自問自答はなかった。予防や防止の証明など出来るはずがない。起きなかったことの理由を、分析的にいくら語ってもむなし。論証するより、そんな目標で授業をするというカテゴリがあるのだと意識してもらうことで十分だと思った。伝わらない人はきっとあるだろうが、それは議論しても詮無いことである。

## 今にして思う

「人間コミュニケーション論」には(実習)の文字が透かし彫りで入っている。大教室で多いときは200人、少ない年でも60~70人くらいの登録がある。八、九割は出席す

るから、決して少人数授業ではない。

はじめ、学生達は、大教室でのコミュニケーションに関わる理論を聞かされるのだろうと思うらしい。シラバスにはちゃんと「実習」授業だと書いてあるのに。

そこからのスタートだから、初回授業開始二十分くらいで、予想と違ったと教室から逃げ出す者が毎年数名はいる。これは仕方ないことだと思っている。

## 授業構成

試行錯誤の結果たどり着いた現在の形がここ数年の基本だ。

開講一番、「木陰の物語」マンガを一話見てもらう。紙芝居のようにパワポのスライドショーで読み聞かせる。五分足らずの話である。

その感想を隣の人と二人一組になって話し合うよう指示する。感想を言い合うだけだが、開始早々に「相手を選んで、自由に話し合え」は、気分的ハードルが高いようだ。友人、知人と一緒に受講している者は、そこでしのぐが、一人で登録した者には気の重いスタートだ。

だから逃げ出す学生もあるのである。正規の受講登録はまだである。しかし、第一回のここで逃げ出す者には、「君こそ受講したらいい人なのに・・・」と思う。そして同時に、人は幸運も不運も、結局は自分で選ぶのだと思う。水辺にロバを連れて行くことは出来るが、飲ませることまでは出来ない。

第一回目の「木陰の物語」の話が確定しているわけではないが、最近「毎週お年玉」を使う。ここまでの授業のオリエンテーションである。



のジムだと考えてください。皆さんは似合わないレオタード姿で居るくらいに思っ  
て、気恥ずかしさはお互いだと認識してく  
ださい」、「では、移動して誰かと二人一  
組になったところから着席してください」

この授業は例年、登録者数より大幅に大  
きな教室が手配されており、移動や別場所  
の確保に困難はない。最初、学生達は教室  
の後方半分に着席していることが多い。こ  
こで少し、着席場所からの自由を体験させ  
る。

しかし教室で初めて出会った未知の人と  
二人一組にと言う指示は、簡単には全体で  
実行されない。そう実行する者も多いが、  
一部のこどもっぽい、自意識過剰の男子中  
心に（近年では同様の女子学生も増えた）、  
どのように指示しても友人、知人と組んで  
しまう者はいる。この段階ではこの件は深  
追いしない。それは彼ら自身の課題だとい  
う認識である。

再度強く促すのは、全15講の中盤にさ  
しかかった頃である。未知の人は、自分を  
呪縛から解き放ってくれる他者であり、既  
知の他者は、自分をその人の知っている私  
から解放してくれないのだということを、  
授業の中でメッセージし続ける。

そしてエクササイズに入るのだが、通常  
の初対面者同士の自己紹介のようなことは  
指示しない。する場合も、学年、年齢情報  
は出すなど指示する。一歳年上とか、二歳  
上を、とても大きな違いがあるなどと思っ  
ているのは、大学生までの子どもだけであ  
る。世の中では相手の年齢情報など、ない  
ことも多い。

## 課題 Good & bad

「Aさん、Bさんを決めてください。交  
代で実習しますから、どちらでも同じです。

先ず今から、一人で4分間、スピーチを  
すると思ってください。内容は何でもいい  
です。気になるニュースでも、サークルの  
ことでも、趣味のこと、スポーツ、バイト  
のこと、大学のこと、何でもかまいません。  
大事なものは深く考えなくても話し続けら  
れる話題であることです。

先ず、Aさんが話します。Bさんは聞き  
続けます。そのとき、Bさんに課題があり  
ます。

私がタイムキーパーをしますので、B  
さんは話が始まったら最初の1分30秒  
は、とても行儀の悪い聞き手として、話を  
聞いていてください。

スマホを触る、他の話している人に気を  
散らす、相手の顔も見ないでゴソゴソして  
いる、鞆の中の何かを探したりする etc。

Aさんは話し続けてください。

1分半経ったら私が知らせますので、残  
りの二分半は、Bさんが考える理想的な聞  
き手として話を聞いてください。

うなづく、相づちをうつ、笑顔を見せる、  
相手の目を見る、etc。」

そして二分半過ぎた合計4分で終了の合  
図を送る。

ここで直ぐ、今度は交代でBさんが話し  
始め、Aさんは同じように悪い聞き手1分  
半、良い聞き手二分半を繰り返す。

それが終わったら、二人で体験のフィー  
ドバックをしてもらおう。

その時、悪い聞き手から良い聞き手に変  
更した段階で、教室全体の音量やパワーが  
グリーンと高まった事実を伝えておく。そし

て5分間、二人で自由に、今経験したことを話し合う。

このエクササイズは短いものだが、初回でもあり、丁寧に意図を解説しながら時間を使って進める。

## 解説

「実際にやってみて、分かったと思います。どんないい話も、聞き手の態度に大きく左右されます。

話し上手、面白いネタ、関西風のオチなど、いろいろ言いますが、良い聞き手があってこそです。

どうでしたか？悪い聞き手に向かって話すのは？授業の指示だとは理解していても、話すモチベーションはどんどん下がっていきましたよね。

そして一分半後、良い聞き手に転じた教室に活気がよみがえりました。みんな感じたと思います。せっかく準備した話も、相手の聴き方がひどいと、どんどんテンションが下がって、あっという間に終わってしまいそうになりましたよね。

話(ネタ)がいいからではなく、聞き手が上手に聞いてくれるから、もっと話したくなるのだという経験です。

分かったと思いますが、会話を支えているのは良い聞き手です。逆に言うと、良くない聞き方は、いろんなものを壊すのです。

余談ですが、授業も同じです。受講生が悪いと、同じ授業でも質は下がります。相手に関係なく提供されるライブなどありません。

自分は上手く話せないからコミュニケーションが苦手。無口だから、なかなか人の

輪に入りにくい、話し上手で社交的な人がコミュニケーション上手だ、これまでそんなことを思ってきましたか？

セールストークをしたいのならそうかもしれない。しかし、コミュニケーションとは、そんなものではありません。

## 毎週レポート

75分ほど過ぎたところで、第一回最後の15分はミニレポートを書いて提出してもらおう。課題(1)は最初の紙芝居の感想と、話し合った振り返りである。(2)は実習について自分の経験したこと、感じたことを自由に書く。

書き終えた者から、レポートを教壇まで提出に来て、退室する。他人のレポートと一緒に持ってこない。自分の分しか受け取らない。

毎週課す課題であるから、自動的に出席評価点になる。五割の配分評価だから、出席が三分の二に満たないものは、単位取得の評価対象外とするとシラバスに明示してある。

これが、「人間コミュニケーション論」のオリエンテーションを含む第一回授業である。

## 二回目以降

第二回目以降は、導入の紙芝居セッションの後に、前回のレポートを読んだ講師からのフィードバック時間が入る。

実習のテーマ、意図は毎回異なっているので、連載の次回からは、どのような課題ラインナップで15回実施するのか、そこで何を目指していて、受講生達には何が届いているのかを記述してゆく予定だ。